

新しいマネージメントの勧め

国際予防医学リスクマネージメント連盟(URMPM)
日本予防医学リスクマネージメント学会(JSRMPM)
理事長 酒井 亮二

日本での予防医学リスクマネージメント学会は9年目を迎えました。この間、URMPMでは医療における安全教育に関する国際プログラムの欠如が指摘され、その開発プロジェクトを日本で推進しております。この安全教育プログラムでは医療現場の皆さまだけでなく、数多くの政策関係者や政治担当者も参加いただいております。また、日本語プログラムにも関わらず韓国や台湾からも参加いただいております。

20世紀から現在まで日本も含めて世界的に、医療の専門界では技術中心主義が主流です。しかし、安全教育プログラムに毎年多数の方々が日本の医療界から参加されておられることを集約すると、「技術的な安全では満足がいかない」ことが背景にあり、「マネージメントが何かを知りたい」という強い要望が医療界には存在する、との結論に至りました。

マネージメントとは何か?

米国では「マネージメントは定量分析による管理」が主流です。これにより、医療安全、安全・安心の経済・経営、食品安全といった様々な分野で、技術の不確実を分析し、その対策を管理するサイエンス文化を意図的に育成しています。徹底的に無駄を省くといった効率化とそのために機械的な品質管理を強く求めており、米国型マネージメントは管理主義そのものです。欠点として、主人公である人の姿が見えにくくなっています。

西欧では「マネージメントはアートである」との考えが主流で、多様性を重視する人間主義そのものです。リスクマネージメントでいえば、技術の安全管理以外に、アーティスト精神が必要です。経営学でも「考える心、相手を思いやる心」などのマインドが重視されています。患者が何を困っているのかを思い至り、人は何を求めているのかを考える、つまり、「想像する知の世界」が西欧型マネージメントです。

この種の知の世界が欠落している組織の体質が、リスク(危険性)を見逃し、事故を予防できず、危機にあつては対応が後手になることの一因になっております。

グローバルな結論として、「サイエンスとアート」の両面を踏まえた、新型のマネージメントが必要です。このような新しい課題への取り組みが世界における医療安全の今後の方向性でしょう。

第8回学術総会(3月11日～12日、東京京王プラザホテル)でも、医療安全に関するサイエンスとアートの両面から多数の講演と討議が企画されており、日本の主催者の方々のご尽力に厚く御礼申し上げます。